

## 15. リリとララの夢の旅

敦賀市立敦賀北小学校

5年 河瀬 亜湖 松本 楓



各務原市立川島小学校

6年 川尻 あつき 沼田 華歩 安保 朱音

少し前のお話です。ある所にリリとララという姉妹がいました。二人はとっても仲よしです。朝から夜までずうーっといっしょにいます。二人にはお互い違う夢があります。お姉ちゃんのララはお医者さんに、妹のリリは小学校の先生になりたいと思っています。

そしてクリスマスの夜、二人はやっぱり、二人で仲よくねました。

「おやすみ、リリ」

「おやすみ、ララ」

「またあした」

そして朝……

「おはよう……」

起きたら、そこは見えない所でなんだかフワフワしていました。そしたら後ろに、妖精が五ひき眠っていました。

「起こしちゃおうかな。でもなあ、でもお」

そんなことを思っていると、五ひきの中の一ひきが目を覚ましました。

「あなた、だあれ？」

と不思議そうに言いました。

「私は、双子のお姉ちゃん」

妹はまだ眠っていました。

「ララって言うの……よろしく。あなたは？」

ララが聞くと、

「……」

妖精は、何も返事をしてくれませんでした。

妹のリリが目を覚ました。

「お姉ちゃん、ここどこなの？」

リリが眠そうに言いました。

「私も分からない」

急に心配になってきて、涙が出そうになってきました。すると、眠っていた残りの妖精たちが起きてきて不思議そうに二人を見て、

「に、人間さんだあ〜！」

「わあ〜い♡」

とうれしそうに言いました。

なぜだろう。

二人は、顔を見合わせました。妖精たちが、  
「ねえねえ、ついてきて。名前は？」

「リリとラウ」

自己紹介をしました。妖精たちの名前を聞いたら、  
「分かんないの……」

と、悲しそうに言いました。リリとラウは言われたとおりについて行きました。そこには、大きな大きな扉があり、

「この中には妖精の世界が広がっているの。だからサイズをあわせなきゃね」

一ぴきの妖精が、つえのような物を出し、まほうをかけました。そのとたん、みるみるうちに二人の体が小さくなり、羽のようなものがはえてきました。

「すっ、すごーい！」

二人はものすごく驚きました。

扉をあけると……。

そこはキラキラと川が流れ、妖精は空をまい、色とりどりの植物はきれいな花を咲かせ、夢のような世界でした。リリは、

「私たち今からどこ行くの？ ねえ」

妖精たちは急いで、

「飛ぶよ」

と声をかけました。その瞬間、二人の体が浮き始めました。二人は、ますます興奮してきました。

「わあー、すごーい」

そして、空の中の小さな階段を上り始めました。また、小さな扉がひとつありました。コンコン。

「やってきましたよ。連れてきましたよ。長老おー、起きてくださあーい」

がちゃ。長老とやらが出てきて目の前に立ちました。

何が始まるんだろう。

(ちょっとそわそわ、少しわくわく)

「おぬしらが新しい者か。よく来た。即刻、言うことを聞いてもらうぞ」

(はっ？ 言うこと？ どういう意味なのかな？)

「いわゆる、おぬしらは家来じゃ」

「えー」

二人は思わず叫んでしまいました。なんだかいらいらしてきました。

「知らないうちに連れて来られて、家来だなんて。早く家に戻りたいよう」

リリとラウは、心配そうに言った。

「何でだろう」

リリが言った。

「リリ、私たち、五人の妖精たちにだまされたような気がするんだけど」

ラウが言った。

「えー、何でえ」

「それが分かんないから、悩んでいるんじゃない」

「何をごちゃごちゃ言っておるんじゃ」

長老が怒り始めました。

「お前たちは、わしの家来になったのじゃから、静かにせんかあ」

リリとラウは、なきだしました。

「二十五回、わしらの言うことを聞いたら、一人ひとつだけ願いをかなえてやる」

長老が言いました。

「やったあ」

リリとラウは一緒に喜びました。

「その代わりに、ひとつでも間違えたら、この話はなかったということだが」

「はい、わかりました……」

「分かったらそれでいい」

長老は大きくなすきました。

「じゃあ、早速ラウよ、外から水を汲んできてくれんかあ」

「はい、わかりました」

「その間に肩をもんでくれんか」

「はい」

二人は、ずっとこれ続けました。

「もー、大変だよ。ラウ」

リリが言いました。

「リリー、リリは大変そうじゃないみたいだね」

「だってあと半分だもん」

「あっ、そうだね」

「もうちょっとだから、がんばろう」

「うん」

「あと半分、あと半分……こう思っていると、言うことを聞くのも楽しくなってくるでしょ」

「おうい、ちょっくら頼むぞ」

「やばい、長老に怒られるかも」

「ちょっくら、配達をしてもらいたい」

「はい」

「これが地図だ」

何とも分かりにくい地図です。しかたなく地図と宅配物を持って出発しました。

「森が多すぎて分かりにくいなあ」

さんざん迷ったあげく、やっと着きました。

「ここかあ」

ピンポーン。

「今、出ますよ」

そこには、ひとりぼっちのおばあさんが住んでいました。何ともいえない不気味なところでした。

「おっ、お届け物です。サファイア島の長老からです」

おばあさんは、急に喜んで、手をさし出しました。

「休んでいきなさい。疲れたでしょう」

「い、い、い、いやいや。失礼なので帰ります」

と断りましたが、二人は顔を見合わせ誘われるがままに、家の中に入ることにしました。ちょっと怖いような、でも、少しくらいなら……いいかなあ。★

入ってみると、気味が悪い人形がたなに並んでいたり、鳥小屋にこうもりが八羽いたり……、気持ちの悪いものばかりです。机には白いポットがおいてありました。おばあさんは、そのポットを手に取り、言いました。

「ほら、そこの席にお座りなさいな。コーヒーをいれてあげよう」

ラウが言いました。

「あ、いいです。コーヒーは飲めないんで」

「あら、そうかね。じゃあ、クッキーでも食べるかね」

リリとラウは迷いましたが、ちょっとぐらいならということで、

「ありがとうございます」

と言い、クッキーをもらうことにしました。そしたらおばあさんは、

「そうかね。じゃあ、今から焼くから待ってて」

と言って振り返り、にやっと笑いました。

でも、この笑いにリリとラウは気付きませんでした。二人が静かに待っていると、おばあさんが、

「ココアか紅茶なら飲めるじゃろ。どっちがいいかい」

と言いました。リリはココアを、ラウは紅茶をたのみました。しばらくして、おばあさんがココアと紅茶をはこんできて、

「さあ、二人ともお茶にしましょう。あなたたちは私に何か聞きたいのじゃろ」

と言って席につきました。二人は、なぜこんな森のさびしいところに住んでいるのか不思議に思っていたので思い切って聞きました。

「なぜおばあさんはこんなところに住んでいるのですか」

すると、おばあさんは悲しそうに話してくれました。

「この家は、私の主人が宝物の家として建てたものなんじゃ。主人は五年前に亡くなってしまった。それからは、主人の宝物は私の宝物として大切に守っているのじゃ。私は死ぬまでここを守らないといけないのじゃ」

二人は、

「へえ、そうなんですか。どうしてご主人の宝物なんですか。なにかあったんですか」

おばあさんは、下を向いてボソボソとつぶやき始めました。

「主人は……、主人は……」

リリとラウは不安になり、

「どうしたんだろう。いやな予感がする」

「うん。帰った方がいいかも」

と小声で話していると、おばあさんは顔をあげて言いました。

「この家は、何と呼ばれているか知っているかね」

「い、いえ、知りません」

びっくりして答えました。おばあさんは不気味な笑いを浮かべながら、こう言いました。

「ふうふう。魔女の家と呼ばれているんだよ」

「えっ」

二人で声をあわせて叫びました。

「あ、あの。そろそろ帰ります。お世話になりました」

二人は玄関に向かいました。すると、おばあさんは、

「まだ、いいだろう」

いきなり口調が激しくなりました。うらは、

「いえ、もう帰ります。仕事が残っているのですみませんが、失礼させていただきます」

と、家を出ようとしてしました。すると、

「ちっ、ばれちゃあ、しょうがないね」

おばあさんの顔が、悪魔の顔に変わりました。

リリとうらは驚き、玄関を飛び出ました。そして全速力で長老のところへ戻りました。

「ハアハア。こわかったああ……」

「うん、逃げることでできてよかった」

「でも、なんで長老は、私たちを魔女のところへ行かせたのだろう」

三十分ほどして、長老がやってきました。

「おおっ、よく帰ってきたな。ごくろうであった。ごほうびにおぬしらのどちらかの願いをかなえてやろう」

リリとうらは困りました。どちらかの願い事だけをかなえてやろうと言われても不公平になってしまいます。うらは、

「長老、なんで一人なんですか。二人ではいけないのですか」

とたずねました。

「うほん。おぬし達は魔女の家へ届け物にいったな。なぜだか分かるか」

「はい、二十五回目の命令だから、きびしいことをしようと思ったんですね」

「うん、そうだ。でも、お前ら二人に本当の友情があるかを調べるためでもあったんだ」

「えっ！」

二人はびっくりした。

「あの魔女の家で、お前達の友情が目覚めたんだ」

二人の心が、ぱあっと明るくなりました。

「だから、二人とも願いを叶えてやるぞ」

「やったあ」

「それで、おぬし達の願いはなんなのじゃ」

「はい。それは、二人で元の世界にもどることです」

二人は仲よく声をそろえて言いました。

「よかろう。世話になったな。元の世界に戻してやろう」

長老はもっていたつえをリリとうらにむけました。

すると、二人は光って消えました。

「ここは、どこ？ あれっ、家だ」

二人が目を覚ますとベッドで並んで寝ていました。

「あれ、何で家なの？ あれっ、これ」

二人が着ていたのは、クリスマスの前の日におばあちゃんに買ってもらった妖精の絵が描いてあるパジャマでした。

「本当だ。夢だったのかな」

それから二人は妖精のパジャマを着て寝ています。妖精や魔女や長老に出会ったことはすっかり忘れて。でも二人はそれからも仲よく暮らしています。